

文章構造に着目した上級読解

浜田 真理子

はじめに

筆者は、今年度(1993年)、学部・大学院の正規学生を対象とした上級読解を週一コマ担当することになった。大学生活ではブック・レポートや小論文に見られるように、「読む」と「書く」ことは切り離せないものである。これを考慮して前期は文章構造に着目した速読を扱い、「書く」準備段階としての読解授業を行った。本稿はその報告である。

1. 対象クラスと速読

学生は、日本語試験の成績がB判定の大学院生5名とAまたはB判定の学部生10名の計15名から成る。国籍は、韓国5名、中国4名、台湾4名、マレーシア(中国系)2名で、全般に漢字語彙力が高いのが特徴と言える。

読解形式には、駒井(1990)、小川(1991)が指摘するように、読む目的により、細部まで理解するための「精読」、娯楽や一般的知識の収集を目的とした「多読」、速く読むための「速読」(または粗読)がある。

この中から「速読」を取り上げることにしたのは、前年度に上級クラス(上2)で速読を担当した経験から、一週一コマ(90分)だけという授業時間数では、文章構造に関するテーマ一つについて、読み・練習問題・解答の検討という一連の作業を、次週に持ち越さずに一回完結にするのが効果的だと考えたからである。

2. 授業計画

2.1. 基本方針

この授業では、文章構造に注意しながら内容を理解して速く読むことを目的とした。すなわち、その文章ではどのようにして話が始められその後どのように展開されているのかを観察しながら、〈何について〉それは〈どうだ〉と書いてあるのかをつかむのが目的である。

実際、物語文では[場面設定—事件—解決]、論説文では[問題提起—解説—結論]または[結論—解説—まとめ]というように、文章の始め・中・終わりは全体として一つの構造を成しており、それに沿って、〈何かについて〉それは〈どうだ〉と書かれているのである。このことを、「読む」ときばかりでなく自分で「書く」ときのためにも学生に意識させるのがこの授業の狙いである。

また、速読という性質上、宿題は出さず、すべて授業中に作業を終えることにした。

2.2. 学習項目

では、文章構造に着目しながら文章の中心内容をつかむには、文章の中で何に注目して読んだらいいのだろうか。この授業では、池上(1983)を参考として、談話レベルに関係のある言語表現に注目して読むよう指導していくことにした。

池上は、談話を談話たらしめている構造的要因を、「結束性」、「卓立性」、「全体構造」の3つに大きく分けている。「結束性」は文と文の続き具合に関するものであり、これを示す手段として指示、置換・省略、語彙的手段、接続詞を挙げている。「卓立性」は特定の部分を際立たせて提示するためのものであり、これには話題、既知と新出、視点が関係するとしている。「全体構造」とは「序論—本論—結論」「起承転結」などの型のことで、ジャンルによっては明瞭な形で現れると述べている。

これらの構造的要因を考慮に入れ、文章構造と意味内容に関する主な学習項目を次のように設定した。

- (ア) 〈話題〉は何か
- (イ) 各段落の中心文を探す
- (ウ) 段落間の関係、すなわち文章構造を探る
- (エ) 文章全体の中心内容をつかむ

(ア)は、文章全体(一段落のこともある)または各段落は〈何について〉書いてあるのかをつかむ練習であり、ここではキーワードに注目させる。キーワードは話題に関係のある語彙で文章の中に繰り返し出てくるものである。同一語のこともあれば、同義語、類義語、対義語など関連語彙の形で出てくることもある。このほか、「～は、～とは、～といえば、～も」など話題を提示する文型¹⁾にも注目させる。

(イ)は、話題について〈どうだ〉と書いてあるのかをつかむ練習である。ここでは、キーワードと〈話題一叙述〉を表す文型のほかに、要約を導く「要するに」「つまり」や、次にまとめ・結論が来ることを示す「したがって」「このように」などの接続語句や指示詞に注目させる(書いてない場合は、文と文の関係を自分で考えてみるように促す)。そして、見つけた中心文が筆者の意見を表すものか事実の記述なのかを区別させる。

(ウ)では、キーワードと接続語句に注目して意味内容の関連を考え、小話題ごとに文章全体をいくつかのグループにまとめて、話の展開のしかたを考えさせる。そして、筆者の意見が書いてある文章の場合は、文章全体の中心となる段落を探させる。

(エ)は文章全体は何について、それはどうだと述べているのかをつかむ練習である。(ア)～(ウ)の作業から、筆者の意見が書いてある文章の場合は文章全体の中心文を選び、筆者は何のためにそれを書いたのか考えさせる。それ以外の文章の場合は、粗筋をおさえさせる。

以上(ア)～(エ)のうち、普通(エ)が文章を読む行為の最終目標になるものと考えられるが、授業ではまず(ア)から(ウ)について別個に練習して学生にこれらの作業を意識させ、その後(エ)の作業に移ることにした。

このほかの学習項目として次のものを設定した。

(オ) 要約する

(カ) 次にどんな内容の段落が来るか話の展開を予測する

(キ) 省略部分などを推測する

(ク) 特定の情報を探す

(オ)は上記(ア)～(エ)の作業を踏まえて、すなわち話題、キーワード、中心文に注目して、文章の重要な部分をまとめて筋の通った文章にする練習であり、大学生活では特に重要な作業の一つである。(カ)と(キ)は(ア)～(エ)の作業をもとに、言語表現だけでなく日本人の考え方も考慮しなければならない作業である。(ク)は、いわゆる scanning と呼ばれる読みの形式であるが、この授業では教師の指示に従って短時間のうちに情報を探し出す作業を行うことにした。

教材の選定にあたっては、読み・練習問題・解答の検討という一連の作業を90分でこなせる分量であること、初期のうちは学習項目がとらえやすいものであることを特に考慮した。

3. 授業の実際

各学習項目については数点の教材を用意し、学生の様子を見ながら適宜選んで使用した。次に、前期で使った教材のうちいくつか紹介する。

学習項目	教材番号 ²⁾	「題名」または題材(文章の種類)
a 読解ストラテジー	①*	「話がちがう」(評論)
b <話題>と中心文	②	朗読の効用(解説文)
c 段落間の意味関係	③	ことばは増えていく(説明文)
d 文章構造と中心内容	④	街の色(論説文)
e 要約	⑤	都井岬の野性論(論説文)
f 特定の情報を探す	⑥	「書店の上手な利用法」(説明文)
g 文章構造と中心内容	⑦	「詩と科学」(随筆)
	⑧*	「国際交流の第一歩は何か」
	⑨	「女が変わり男が変わる」(評論)

h 要約

⑩* 『若い者は働かない』の錯覚(随筆)

(* 印の教材については[資料]参照)

以下、作業手順を述べる。

授業初日にはガイダンスを行い、2.1.で述べた基本方針を説明した。また、授業中の限られた時間内に「読む」ために、次の事項を一般的注意として与えた。

- イ 逐字、逐語読みをしない。黙読する。
- ロ 文と文の関係、段落と段落の関係を考えながら読む。
- ハ 分からない言葉が出てきても、辞書を引かないで読んでみる。重要な言葉(キーワード)だと思ったら、その漢字、前後の言葉、文脈、話題、題名などから類推する。辞書は練習の後で引く。
- ニ 書いてあるもの(文章、図表など)だけでなく、自分の知識や経験なども駆使して読む。ただし、自分の考えは織り混ぜず、まず筆者の考えを読み取る。
- ホ 文章全体を通して読む速度を一定に保つ。

その際、語彙は日常生活の中で増やすこと、「読み」における漢字語彙の重要性、を強調しておいた。また、文章を読むときはいつも、まず題名を見て(場合によって絵、図表なども見て)話題は何かを考えてから読み始めるように注意した。そして、内容を理解して速く読むには文章の中で何に注目して読んだらいいかについて説明したあとで、今後どのように授業を進めていくかを紹介するために教材 ① を使ってガイダンス授業を行った。

教材 ① は4段落から成る600字余りの短い文章で、第1段落で文章全体の〈主題〉を提示しており、第2段落では喩話で主題の例示を行い、第3段落で主題をさらに明確に説明して第4段落で主題のまとめを述べており、文章構造のはっきりしているのが特徴である。ここではまず、一通り黙読させてから、文章全体は〈何について〉それは〈どうだ〉と書いてあ

るのかく主題〉を探させ、それを示す文型に着目させた(ここでは、題・述を示す典型的な文型「～は～である」)。次に、段落間の関係を考えて文章構造を探った。ここでは、上述の通り、序論(第1段落[主題提示])—本論(第2段落[例示]—第3段落[主題の明確化])—結論(第4段落[主張とまとめ])という展開になっている。さらに、題名「話がちがう」は具体的にどのようなことを指しているのか、キーワードまたは中心文を挙げさせた。最後に、著者がこの文章を書いた目的を問い、それは第4段落から読み取れることを確認させた。

② は朗読の効用を4段落にまとめた文章である。ここでは、文章の話題、各段落の中心文を探し出させてから、その手掛りになったのはキーワードと接続語句「だから」と「つまり」であったことを確認した。

③ は新語と外来語によってことば数が増えていくことを9段落にわたって述べた文章である。まず、内容のまとまり(共通の小話題)を考えて3つのグループに分けさせ、それぞれのグループに小見出しをつけさせた。これは、キーワードをつかんでいるかどうかをみるためである。次に、各グループの中心段落はどれか、その中心段落とその他の段落との関係はどうなっているかを答えさせた。段落間の関係についてはこの教材で初めて扱うので、関係を示す用語の一例をあらかじめ挙げておいた(例：話題提示、問題提起、問題解決、解答、説明、例示、定義、理由、意見、推測、提案、結論・まとめ、実験、観察、結果)。これらの練習の答えは表にまとめさせたが、これは文章を書く際のアウトラインの作成作業に相当することを言い添えておいた。

ここまでで、文章構造に関する個別の練習が終わった。次の段階では、これまで学習してきたことをふまえて、文章全体は〈何について〉それは〈どうだ〉と述べているのかをつかむ練習に入った。

④ は、日本の環境行政は町並みの色彩制限についてもっと積極的であってほしい、という主題を6段落にまとめた論説文である。この文章は大きく4グループに分けられ、話題提示・結論(ここでは主張)、主張の根拠

その1(例示と評価)、主張の根拠その2(例示と評価)、まとめ、の順で書かれている。この文章については、話題は何か、筆者の中心主張はどこに書かれているか、文と文の関係・段落と段落の関係はどうなっているかを問い、これまでの練習の総復習とした。

⑤ は、観光用の餌付けによって野性を失いつつある宮崎県の野性馬の社会でも、経済的に豊かになったヒト社会と似たような現象が起きていることを述べている。ここでは、まず字数を制限して要約文を書かせた後、各自の文の講評を行った。これは、これまで学んできたことをどのくらい生かしているかをみるためであった。学生の大半は論旨を的確につかんでいたが、例を多く出しすぎて主題がぼやけたり、ヒト社会のほうに重点を置いて書くなど、文章の分量のバランスに問題のある学生もみられた。講評の際、文を短くまとめる方法³⁾も紹介した。要約の手順については口頭で述べただけであったが、板書して再確認したほうが効果的だったろうと思われる。

⑥ は書店の利用法を紹介した公報誌で、学生には身近な話題を扱っており、文章も非常に分かりやすい。そのため、特定の情報を探す練習では教師が指示を与えて探させることが多いが、今回は教師の側からは「書店で何かしたいとき、どうしたらよいか」という【問題設定—その解決】のパターンだけを指示しておき、学生が文章を読んでその〈何か〉も探すことにした。この練習では、時間を限らず、何分で書き終わったかを記入させた。

ここまでの作業で速読の基本的段階が終わったとみなし、教材⑦～⑩は応用練習として使用した。

⑦ は詩と科学の類似性を述べた文章である。ここでは、段落ごとに順不同に切り放したものを並べ換えて文章を再構成する練習をし、文章全体の題をつけさせた。さらに中心内容についても答えさせた。ここでも、キーワードの反復と接続語句が手掛りとなっている。

⑧ は、国際交流の第一歩は相互の人間理解のために相手と共通のこと

ばを持つことである、という主題を6段落で述べた文章である。初めの3段落で主題を順次説き明かし、後の3段落で、相互理解がなくて交流がうまくいかない例を挙げている。ここでも段落を並べ換えて文章を再構成する練習、段落冒頭に接続語句を選び入れる練習、著者の意見を述べた中心文を3つ選ぶ練習を行った。これらの練習でも語彙のつながりが手掛りとなるが、文章全体が構成上大きく2つに分けられることも理解する必要がある。後半3段落の並べ換えでは次の2通りの解答が返ってきた。

ア. 客を招くとき一客が帰るとき一相手に招かれたとき

イ. 客を招くとき一相手に招かれたとき一客が帰るとき

原文はアであるが、ロを選ぶ日本人も実際にはいる。そこで、著者はなぜアの順で書いたのかを話し合ってみたところ、時間配列で書いてあるという答えが得られた。

⑨ は、女性の社会進出が目覚ましいのに対して男性は依然として会社人間が多いが、男性も着実に変わり始めており、90年代は男性の変わる時代と期待している、という内容の文章である。ここでは、正しい内容の文を選ぶ練習のほか、空欄に接続語句やキーワードを入れさせたあと要約文を書かせ、試験代わりとした。

⑩ は、今の若者は働かないというのは大人の錯覚で、働く仕組みを作りさえすれば働くし、自分たちが若い頃は先輩の指示が不十分でも今の若者より働いていたというのも錯覚かもしれない、という内容を述べたものである。この文章は分量が多いため、まずリレー式に学生に音読させて漢字の読みを与えた後、「錯覚」の意味を確認した。次に、タスクシートを配って、正しい内容の文を選ばせる、文章の要点について答えさせる、題名の語句を使ってこの筆者の立場から要約文を書かせるという作業をおこなった。なお、要約文の検討は時間内にはできず、次回に行うことになった。この教材は、要約文を書かせる前の段階として、アウトラインを作る練習にも適していると考えられる。

4. ま と め

(1) 読解力について

- ・読解力の伸びは学生によって差が見られた。伸び悩んだ学生は、論の展開を読み取るときに、その筆者の考えに沿って読み進めることをしないで自分の意見を絡めながら読んでいく傾向が見られた。

- ・要旨は的確に読み取れても、要約文を書くのが苦手な学生がかなり見られる(特に男子学生)。これは、その文章の筆者の考えを学生自身の言葉で書こうとして論調が強くなり、学生自身の意見と受け取られかねない文章となってしまうためである。

(2) クラス運営

- ・練習問題の答えは一つだけとは限らないので、必ずクラス全員で検討し、納得の行かない場合は話し合いを行った。また、読んだ文章について学生から意見が出たときは、時間に余裕があまりない場合でも取り上げた。これは、意見の交換はクラスでこそできる作業だという意識が学生にあることを考慮したためであるが、これによりクラス運営がかなり円滑にいったと思われる。

- ・辞書は練習中は使わない方針で授業を始めたが、4,5回目からは使用を認めたほうが効果が上がった。このクラスの学生は漢字の読み方の類推がきくので辞書を引くにもあまり手間取らず、気になることばの意味が分かって安心して読み進めることができたためとみられる。

(3) 教材

- ・時事問題、時の話題を扱ったものなど生教材を使ったほうが学生の意欲を引き出せるため、今後は学生の関心を考慮して、文章の種類を増やしていかなければならないと考えている。

(4) 指導法

- ・言語表現のうち、学生はまず語彙に着目する傾向が強い。語彙が集まって文を成しさらに文章を構成することを考えると、これは当然のことと言えるのかもしれない。したがって、こうした学生の傾向を生かすための指

導法やキーワードの反復のしかたなどについて研究を進める必要があると思われる。

・接続語句については、読むときは特に問題は見られなかったが、文章中の空欄を埋める練習は苦手な学生が多かった。これは、書くときに使いこなせないことを意味する。しかし実際には、接続語句の使いすぎは読んでいて煩わしいとも言われるので、どんなときに使いどんなときに使わないほうがよいのか今後の課題としたい。

注

1) 話題を提示する文型については次の2冊を参考にした。

北條淳子(1989)『複文文型』『談話の研究と教育Ⅱ』(日本語教育指導参考書 15) 国立国語研究所

日向茂男・日比谷潤子(1988)『談話の構造』(外国人のための日本語 例文・問題シリーズ16) 荒竹出版

2) 教材の出典は次の通り。

① 河合隼雄『老いのみち』読売新聞社

②③ 四谷大塚進学教室編『日本語総合問題集』凡人社 1頁, 9-11頁

④ 朝日新聞天声人語欄(寺村秀夫他編『ケーススタディ日本語の文章・談話』桜楓社 別冊[共通資料[D]])

⑤ 朝日新聞天声人語欄(松村 明他『高等学校 国語表現』旺文社 27-28頁)

⑥ 紀伊國屋書店 KINOKUNIYA TIMES・READING WEEK, 1990

⑦ 湯川秀樹『詩と科学』湯川秀樹著作集』第6巻

⑧ 鈴木孝夫『国際交流の第一歩は何か』『日本語と外国語』岩波新書 109-110頁(早稲田大学日本語研究教育センター 中級用読解教材 27)

⑨ 菅原真理子『女が変わり男が変わる』『楽しいわが家』1991年1月号 全国信用金庫協会

⑩ 大江淳良『『若い者は働かない』の錯覚』『春夏秋冬』1988春 第一勧業銀行(早稲田大学日本語研究教育センター 中級用読解教材 45)

3) 『実践にほんごの作文』第7課参照。

参考文献

日向茂男・日比谷潤子(1988)『談話の構造』(外国人のための日本語 例文・問題シリーズ16) 荒竹出版

- 池上嘉彦(1983)「テキストとテキストの構造」『談話の研究と教育 I』(日本語教育指導参考書 11) 国立国語研究所
- 川口義一(1991)「中級クラスの速読指導」『講座 日本語教育』第 26 分冊 早稲田大学日本語研究教育センター
- 北條淳子(1989)「複文文型」『談話の研究と教育 II』(日本語教育指導参考書 15) 国立国語研究所
- 駒井 明(1990)「上級の日本語教育」『日本語教育』71 号
- 松村 明他(1993)『高等学校 国語表現』旺文社
- 名柄 迪・茅野直子(1989)『文体』(外国人のための日本語 例文・問題シリーズ 9) 荒竹出版
- 小川貴士(1991)「読みのストラテジー、プロセスと上級の読解指導」『日本語教育』75 号
- 佐藤政光他(1986)『実践にほんごの作文』凡人社
- 寺村秀夫他編(1990)『ケーススタディ日本語の文章・談話』桜楓社
- 四谷大塚進学教室編(1990)『日本語総合問題集』凡人社

[資料 1] 教材 ①

話 が ち が う

現代における「老い」の問題は実に深刻である。それがどんなに大変なことが、ひとつのたとえ話をしてみよう。

町内の運動会に参加。五百メートル競走に出て、必死になって走り抜きやつとゴールインというところで、役員が走り出てきて、「すみません八百メートル競走のまちがいでした。もう二百メートル走って下さい」などと何うとうなるだろう。最初から八百メートルと言われておれば、もちろんそのペースで走っている。五百のつもりで走ってきたのは、それじゃ話がうじゃないか、だがあと二百メートルも走れるものか、ということになるだろう。

現代の老人問題にはこのようなところがある。人生五十年と教えられ、そろそろ迎えでも来るかと思っていたのに、あと三十年あるというのだ。そんなことは考えても見なかったことだ。昔も長寿の人が居たが、それは特別で、それなりの生き方もあった。ところが今は全体的に一挙に人生競走のゴールが、ぐっと遠のいてしまった。

こう考えると、現代の「老い」の道は、人類が今まで経験していなかったことであることがわかる。みちには未知に通じる。老いの道は老いの未知でもある。このような未知の問題について考えてみようと思う。大上段にふりかぶつての論議ではなく、思いつくままに気楽に書かしていただくので、読者の方々はそれをヒントにして、自分なりの考えを発展させていただきたい。

[資料 2] 教材 ⑧

「国際交流の第一歩は何か」

イ、①（ あ ）相手に家に招かれたら、備品や調度類はたとえその美しさ、素晴らしさにうたれても、決して賞めてはならない。②それは、私に下さい、という意味にとられかねないからである。③このようなことを知らないと、なまじアラビア語やベルシャ語が喋れることが、かえってマイナスになってしまう。

ロ、①（ い ）アラビア語やベルシャ語を学んだ人が、イスラム教を奉じている人を食事に招待するような時、せめて豚肉だけはどんなことがあっても料理に加えてはならぬとか、酒類も出さぬ方が安全だといったくらいのは、常識として知っていなければ困る。

ハ、①（ う ）お客が帰るとき、こちらの招待に対するお礼を相手が余り言わなくても、不審に思ったりしてはいけない。②お礼はむしろ主人側が、来てくれた客に言うべきものという習慣なのだから。

ニ、①現在の日本は、国としては世界一の金持ちになり、日本からいろいろな目的で海外に出て行く人が、今年（1989年）は遂に1000万人を越すらしい。②日本の工場や商店は、世界の至る所に進出し、外国からありとあらゆるものが輸入され、日本を訪れる外国人旅行者の数も、既に年間 300万人に迫っている。③それどころか大都会では、日本人に混ざって働いている外国人を見かけることも珍しくなくなった。④まさに国際化の時代である。

ホ、①（ え ）国際相互交流を目的とする言語学習の最も重要な狙いは、相手を知り、自分を相手に分らせるという相互の人間理解であろう。②ことばの学習を通して、相手がどのような文化をもつ人間であるかを知るように絶えず努めないと、無知や誤解が原因で、無駄な摩擦が起こったり、感情的な対立が生まれたりで、交流はうまくいかない。

ヘ、①（ お ）、庶民レベルで外国人との直接のつき合いが増えてくると、何よりもまず必要なことは、お互いの意志を円滑に通じさせるために、共通のことばをもつことである。②これには二つの方法があって、一つは一般の日本人の外国語運用能力を高めること、もう一つは出来るだけ多くの外国人に、日本語を広めることである。

I. 段落イ～ヘを並べかえて、意味の通る文章にしないさい。

II. 本文の（あ）～（お）に、次の中から言葉を選んで入れなさい。（一語一回戻り）
このような このような場合 そして たとえば また

